

## 「路上観察学会」の意義についての考察

### －赤瀬川原平、藤森照信、荒俣宏の個人的活動の比較分析を通して－

#### □レジュメの構成

□レジュメの構成□論文の構成□本論、考察、結論□参考文献、図版出典

#### 論文の構成

序論	
第一章　本研究について	【3-5-4】赤瀬川原平と宮武外骨の構造的分析・共通する紙幣印刷行為による政治的敗北を通して-
【1-1】研究の動機	【3-6】手法の引用元としての過去との比較分析
【1-2】目次	【3-7】小結
【1-3】研究の目的	第四章　学会員が観察した物件についての分析
【1-4】研究の手法	【4-1】はじめに
【1-5】研究の対象	【4-2】赤瀬川原平について－「超芸術トマソン」の発明
【1-5-1】研究対象の選定理由	【4-2-1】トマソンから路上観察へ
【1-5-2】研究対象の詳細について	【4-3】藤森照信について－路上での観察行為の開始
【1-6】既往研究と本研究の立ち位置	【4-3-1】東京建築探偵団
【1-6-1】既往研究について	【4-3-2】「看板建築」の発見と命名
【1-6-2】本研究の位置付け	【4-4】荒俣宏と藤森照信による東京路上博物倶楽部での収集
【1-7】路上観察学会について	【4-4-1】路上博物倶楽部の概要
【1-7-1】路上観察学会の学会員について	【4-4-2】藤森照信による路上博物倶楽部
【1-7-2】共同体としての特徴	【4-4-3】荒俣宏による路上博物倶楽部
【1-8】用語定義	【4-5】小結
第二章　学会員が<観察行為>に移行する契機についての分析	第五章　路上観察学会の後の活動への影響についての分析
【2-1】はじめに	【5-1】はじめに
【2-2】赤瀬川原平について	【5-2】赤瀬川原平について－私小説の執筆の開始
【2-2-1】自己表現を伴う美術館での表現行為	【5-3】藤森照信について－建築設計行為への移行
【2-2-2】前衛芸術家の作品における自己表現の消滅	【5-3-1】建築家としての藤森照信
【2-2-3】自己表現を伴わない表現行為	【5-4】荒俣宏について－<帝都物語>を通して
【2-2-4】模型千円札に起因する政治的敗北	【5-4-1】帝都物語 概略
【2-3】藤森照信について	【5-5】藤森照信による建築設計と路上観察学会からの影響についての分析
【2-3-1】アカデミックでの歴史の観察	【5-6】帝都物語の路上博物倶楽部、路上観察学会からの影響についての分析
【2-3-2】村松貞次郎『明治の西洋館』での現存する明治時代の建築の観察	【5-6-1】『帝都物語』あとがきからの分析
【2-4】荒俣宏について	【5-6-2】平井 [2013] を用いた路上観察学会からの影響の考察
【2-4-1】博物学への興味の原点	【5-6-3】『帝都物語』の論構成として 25 年単位論についての考察
【2-4-2】博物学者として観察行為	【5-6-4】『帝都物語』と「南方曼荼羅」
【2-5】小結	【5-7】小結
第三章　学会員の観察手法における分析	第六章　比較分析
【3-1】はじめに	第七章　考察
【3-2】赤瀬川原平について	【7-1】はじめに
【3-2-1】編集者 宮武外骨の再発見	【7-2】路上観察学会の前と後の個人的活動から「路上観察学会」の意義の考察
【3-2-2】<目的のための観察から手法としての観察へ>	第七章　結論
【3-3】藤森照信について	参考文献
【3-4】荒俣宏について	図版出典
【3-5】トマソン理論の書評における表現方法について	巻末資料
宮武外骨からの影響についての分析	謝辞
【3-5-1】トマソンの返答と宮武外骨の表現の面白さについての比較	
【3-5-2】藤森照信と宮武外骨の表現の面白さについての比較	
【3-5-3】トマソン理論についての考察	

第一章　はじめに	第二章　学会員が<観察行為>に移行する契機についての分析	第六章　比較分析
	第三章　学会員の表現手法における分析	第七章　考察
	第四章　学会員が観察した物件についての分析	第八章　結論
	第五章　路上観察学会の後の活動への影響についての分析	
序論	本論	考察、結論

図 1 本論文の構成

本論文では、「路上観察学会」についての基礎研究であることを意識した。彼らについて過不足のない情報を獲得するために、5WIHを用いた。また、路上観察学会ののちの活動の情報を得る。活動の前後の情報を用いて、路上観察学会の意義を考察する。

□第二章では Why、なぜ観察行為を開始したのか。

□第三章では How、どのように観察した物件を表現したのか。

□第四章では What、なにを観察対象としたのか。

□第五章では After、その後どのような活動を行なったのか、について情報を収集した。5WIHのうち、Where、When、Who に関しては第一章にて、記す。

#### □本研究の意義

本研究は、「路上観察学会」が解案学を思考する上でその手法は有効なものではないかと考えたことが契機である。「路上観察学会」は「モノ」を生産する方法ではなく、「モノ」を異なる視野から再発見することによって、社会の循環構造へ導入する方法を探していたとみえる。ここで、「人間による物質の生態変化 MAP」を用いると、「路上観察学会」は、「**目的や過程が捨象された**」物質を観察し、表現によって、「**人間と物質を遭遇**」させた共同体であったと仮定した。ここに、「路上観察学会」における「解案学」の有効性があると考えられる。

また、「路上観察学会」は、学問的に研究する価値がある共同体であるにも関わらず、先行研究が存在しない。解案学のみならず、社会学、認知心理学、メディア学など様々な視点からの研究が可能であろう。社会的に影響を与えた「路上観察学会」について本研究を発端として、様々な分野で研究するための土壌を整えることも本研究の重要な意義である。

### □本研究の目的

- 対象の 3 名の学会員の活動を路上観察学会の前と後について情報を整理、分析すること
- 「路上観察学会」が存在した意義について考察すること

### □本研究の対象の選定について

□路上観察学会

路上観察学会は、学会員 15 名で構成される共同体である。学会員はそれぞれ都市に存在する物件を観察し、それぞれの手法で表現していた。赤瀬川は、路上観察学会は藤森照信と松田哲夫の二軸で構成されると述べた。松田は、事務局長として参加していた。本論文では、「観察」したものを実際に「表現」した人に着目したい。表現手法を構成する際に、その背景で分類することによって、本研究の対象を決定した。

□芸術を背景に持つ学会員、赤瀬川の周辺

赤瀬川原平、南伸坊、田中ちひろ、鈴木剛、飯村昭彦、松田哲夫

□建築に背景を持つ学会員、藤森の周辺

藤森照信、堀勇良、一木努、林丈二

□その他の学会員

荒俣宏、四方田犬彦、杉浦日向子、森伸之、とり・みき

以上から、芸術を背景に持つ赤瀬川原平、建築を藤森照信を選定する。また、荒俣は、路上観察学会の前身である「路上博物倶楽部」に参加し、そこで「観察」、「収集」したものを積極的に「帝都物語」にて導入していた。これらの三者は、表現方法に差異があると考えたので本研究の対象とした。

### □本研究の対象の詳細について

□赤瀬川原平

一九三七、横浜生まれ。画家。作家(尾辻克彦)。六〇年代には「ハイレッド・センター」など前衛芸術家として活動、七〇年代には「櫻画報」などイラストレーターとして活躍、八一年には「父が消えた」(文藝春秋)で芥川賞受賞。七〇年から美学校で「絵・文字」(考現学)を教えた。主著に『櫻画報大全』(青林堂)、『超芸術トマソン』(外骨という人がいた!(ちくま文庫)、「カメラが欲しい」『東京路上探検記』(新潮社)、『名画読本』(光文社)、『正体不明』(東京書籍)などがある。

□藤森照信

一九四六年、長野県茅野生まれ。建築史家、東京大学生産技術研究所助教授。近代建築の文献的研究にあきたらず、七四年から研究室の同僚・堀勇良氏と都内の近代建築の实地調査をはじめ、後に他のメンバーも加え、「東京建築探偵団」として「近代建築ガイドブック(関東編)」(鹿島出版会)を刊行。主著には『明治の東京計画』(岩波書店・毎日出版文化賞)、『建築探偵の冒険・東京編』(ちくま文庫)、『日本の近代建築(上)・(下)』(岩波新書)などがある。

□荒俣宏

一九四七年、東京生まれ。幻想文学・神秘学・博物学研究者。翻訳家。慶応義塾大学法学部卒業。学生時代から幻想文学の翻訳をてかけ、やがて神秘学や博物学へとその関心をひろげていったエンサイクロペディスト。主著に「大博物学時代」『理科系の文学誌』(工作舎)、『図鑑の博物誌』(リプロポート)、『99 万年の叡智』(平河出版社)、『パラノイア創造史』『目玉と脳の大冒険』(ちくま文庫)、『帝都物語』(角川書店)、『大東亜科學総論』(筑摩書房)などがある。

#### 先行研究

□路上観察学会の共同体について

ジョルダン・サンド [2021] 『東京ヴァナキュラー』, 新耀社

藤森照信, 中谷礼仁 対談 [2019] 『考現学とはなにか』, 現代思想 七月号 第四十七号

□赤瀬川原平について

菅章 [2022] 『ネオ・ダダの逆説』, みすず書房

□藤森照信について

松田周作 [2004] 『岡本太郎との対比にみる藤森照信論』

□荒俣宏について

平井雄一郎 [2013] 『帝都物語』と二つの「都市史」: 劇映画による歴史叙述の転義法

□路上観察学会の個人を複数人から論述した研究は存在しない。

### 本論

### □第二章 学会員が<観察行為>に移行する契機についての分析

□赤瀬川原平

赤瀬川が出展した<売壳アンデパンダン展>は、出展規制のないことを特徴としたため、出展される作品も他の展覧会とは異なり、画面から飛び出し、床を這う作品が多く出展された。しかし、本展覧会の作品制作に使用した「スクラップ」そのものの方が物質としてのパワーがあること、作品が美術館を飛び出し、苦情が入り、出展に規制のない展覧会であったはずが、美術館という権力によって規制を設けられたことをきっかけに赤瀬川の表現に変化が現れた。それは、観察による芸術表現と表現行為の路上化の二通りであった。前者は、千円札を細かく書き写すことによって作品化され、後者は、「モノ」が路上ににて無意識に人によって攪拌される行為全体を作品化していた。観察行為によって、制作された「模型千円札」を実寸大に印刷し、配布したことによって、偽札使用のチ 37 号事件の主犯格であると疑われ、被告となってしまう。赤瀬川は、模型千円札の制作から配布までの一連の行為を「芸術表現」であると主張するが、通貨及証券模造取締法の容疑で有罪判決を受ける。

美術館による出展規制、司法における芸術の理論的敗北と「スクラップ」の観察行為に魅力を感じたことによって、表現段階は終了し、観察段階が開始される。赤瀬川は後年にスクラップの観察はトマソン発見の前史であると述べた。

□藤森照信

藤森は、東京大学の村松貞次郎の下で『明治の西洋館』に寄稿するために、西洋館を探索する。そこで「五感で味わった現場ならではの感覚」を体感する。しかし、体感したもののうち、学術論文という形で掬える量はごく僅かであり、目玉と肉体が納得しなくなってしまう。**これが契機となって、意識的に路上での観察段階が開始される。**

□荒俣宏

荒俣は、幼い頃から、「収集癖」をもつ人物であった。当時は、妖怪や魚類などへの興味からその「知識」を収集していたが、その過程で南方熊楠をはじめとする近代博物学に触れることによって、「妖怪」が博物学の対象であることを知る。このような契機から荒俣は観察行為を意識的に開始する。

□小結

赤瀬川原平と藤森照信の観察行為の開始は、それぞれ芸術と建築の本流に相対する形であったことがわかった。また、荒俣宏は、幼い頃からの収集癖は、博物学的手法に基づくものであることがわかった。

### □第三章 学会員の表現手法についての分析

□赤瀬川原平

赤瀬川は、千円札事件の最中に**宮武外骨**という編集者によって発刊された『滑稽新聞』に出会う。裁判の終了とともに芸術段階は終了し、観察段階へと突入する。『滑稽新聞』の内容は世の中のゴシップを重視し、表現ではスキャンダルリズムを武器としていたという。また、赤瀬川は宮武の表現の面白さを五つに大別した。しつこい/滑稽である、即物的である、罵倒している、科学的に論じている、行動的である。

□藤森照信

藤森は、観察の契機となった西洋館を探している際、のちに「看板建築」と命名される建築を発見する。看板建築が作られた関東大震災の復興期を研究する中で**今和次郎**によって提唱された「考現学」を知ることとなる。藤森は後年に、考現学を再生させたいという意志を持っていることを話した。

□荒俣宏

荒俣は、**南方熊楠**を知ることによって、博物学が「眼に見える自然」のみならず、「妖怪」と博物学を掛け合わせて、妖怪博物学を展開した。

□路上観察学会における「**考現学的観察手法**」と「**宮武的表現手法**」についての分析

・物件の表現手法として宮武外骨の影響があるのではないかと。

路上観察学会は常々、今和次郎は考現学の系譜にあると言われてきた。考現学は、次のような表現、観察手法を用いていた。

「正確に、人、場所、地徴の特徴を描写することからはじまる。今は調査者に観察対象であ

る人々の生活の特徴を、すべて、しかもできるだけ細かく集めることを求めた。」<sup>1</sup>

しかし、路上観察学会による書籍を読むと、違う要素を含んだ表現が見受けられた。

ここで、考現学とは異なる表現手法を用いていたのではないかと考えた。赤瀬川は、宮武外骨の表現の面白さについて5つに大別した。しつこい/滑稽である、即物的である、罵倒している、科学的に論じている、行動的である。考現学の表現手法と宮武の表現手法で異なるのは、しつこい/滑稽である、罵倒しているの二点である。赤瀬川による『超芸術トマソン』、藤森による『建築探偵の冒険 東京篇』は、考現学的手法によって観察されたものを考現学の表現手法のみならず、しつこい/滑稽である、罵倒しているような表現を含んでいたことがわかった。このちに結成される路上観察学会による書籍を分析したところ、考現学的観察手法と宮武的表現手法を用いていたことがわかった。

□学会員が参考にした人物との時代の比較

ここまでで、赤瀬川、藤森、荒俣が宮武外骨、今和次郎、南方熊楠を再発見し、それぞれ手法を参考にしていたことがわかった。彼らを時代で分類すると、1970-80 年代と 1910-20 年代に分けられる。

1930 年代は、モダニズムと西洋過去様式、新古典主義建築を中心として様式上の混乱期であった。ここで、長谷川堯が 1930 年代を語るために用いた 25 年単位論を用いる。長谷川は、10-20 年代を芸術、文化運動が抑圧、圧殺された時代、30 年代以降の政治による文化のとり込み、回取がなされた時代であったと述べる<sup>3</sup>。また、70 年代以降の政治、文化は、30 年代－第二四半期を映し出す、と述べた。20 世紀を四半期ごとに分割すると、第一四半期、第三四半期は「文化が政治に抑圧、圧殺される時代」で、第二四半期、第四四半期は、「政治によって文化が取り込まれる時代」であった。25 年単位論を用いると、以下のように解釈できる。

		宮武外骨	今和次郎	南方熊楠
1900-1925	政治による文化の抑圧、圧殺	独人的思想	対本流的態度	博物学的手法
	関東大震災			
1925-1950	政治による文化のとり込み、回取			
	第二次世界大戦	赤瀬川原平	藤森照信	荒俣宏
1950-1975	政治による文化の抑圧、圧殺	千円札事件での敗北	アカデミックでの敗北	
	三島由紀夫の自決、天皇制の貫貫			
1975-1999	政治による文化のとり込み、回取			

このような時代の解釈を施すと、政治による文化の抑圧、圧殺されていた 20 世紀の第一四半期の人の手法を第三四半期に再現していたということである。

□小結

赤瀬川原平は宮武外骨から、藤森照信は今和次郎から、荒俣宏は南方熊楠から表現手法を得ていたことがわかった。また、路上観察学会の学会員は表現手法を第一四半期に見ていたこともわかった。それぞれ、「政治による文化の抑圧、圧殺」が行われる時代であったことが表 1 から見て取れる。

### □第四章 学会員が観察した物件について

□赤瀬川原平

赤瀬川は、自身が講師であった美学校で、宮武外骨から表現行為を学ぶための座学と今和次郎による考現学的な観察手法学ぶためのフィールドワークを同時に展開した。その後赤瀬川は、フィールドワークで**「無用であるが美しく保存された物件」**を発見した。これを「超芸術トマソン」と命名し、雑誌に寄稿すると同時に読者から「トマソンの疑いのある物件」を募集し、それらに対して返答をした。雑誌に寄稿をするスタイルとその返答は、赤瀬川原平によって分析された編集者である宮武外骨の雑誌表現の面白さを踏襲していた。

□藤森照信

藤森は、アカデミックで掬えないものに対して、目玉と肉体が納得しなかったことから、研究室の後輩であった堀勇良とともに「東京建築探偵団」を結成する。ここで、<日本近代建築史研究のための三大プロジェクト>を画策する。<日本中の近代建築を見ること>、<すべての近代建築書を読むこと>、<すべての建築家の遺族をたずねること>の三つであった。対象は、**西洋館、動物装飾**であった。建築探偵の活動中に**看板建築**を発見する。

□藤森照信と荒俣宏

藤森と荒俣は、都市における全てのオブジェを収集することを目的として「路上博物倶楽部」を結成する。荒俣は、当時執筆を開始していた『帝都物語』で藤森の『明治の東京計画』を下敷きに都市を描いていた挨拶がきっかけとなって、藤森との交流が開始される。藤森と荒俣は、共に博物学的収集癖を持っていたことから博物学を共に行うこととなった。そこで対象となったのが**都市におけるすべてのオブジェ**であった。ここにはじめて意識的に「路上」というコンセプトが荒俣によってもたらされた。

□小結

赤瀬川原平は、トマソン理論を構築することによって、独人的な思想を得た。また、藤森は東京建築探偵団、路上博物倶楽部にて博物学的収集をしていた。荒俣は、藤森と同様、路上博物倶楽部にて博物学的収集を行っていた。

## 第五章 路上観察学会の後の活動について

### 赤瀬川原平

トマソンの収集は、1970年代には終了し、路上観察学会の活動が始まる際には、すでに路上の観察から自らの身の回りの観察する段階へ突入していた。赤瀬川は、路上観察学会の活動以後、私小説を執筆していた。

### 藤森照信

建築史家であった藤森は、その後建築家としての活動を開始することとなる。路上観察学会で都市を意識的に観察した際に、高層ビルに付属する「エコロジー」のあり方に疑問を持ち、その経験を活かした。「エコロジー」を建築で解決するために、建物の周辺の空地に木々を植えていたが、それでは飽き足らず、建築本体に植物を植え込もうとした結果、屋上庭園が発生したという。藤森は、建築全体で解決されなければならないことは、「エコロジー」が「目のため」に設置されるべきであると述べた。路上観察学会にて藤森は、「目のための緑化」が成された素人によって作られる建築を実例として収集し、科学的な判断の元、ゼネコンの社員に説得するも、座を賑わす程度で実際に施工されることはなかった。ここで、自らによって建築設計を開始する。松田 [2004] によれば、藤森建築における重要な建築姿勢は、赤派/ 緋文・原始/ 素人性であると述べた。藤森は、路上観察学会にて、「素人」の好奇心によって、徐々に建築が緑化された例を収集したものからの影響を考えた際、路上観察学会の活動からこれらの姿勢について言及できるのではないかと。藤森は、都市における「エコロジー」、自然は「目のための緑化」であるべきだと述べた。当時の「エコロジー」は周辺の空地では飽き足らず、建築本体に植物を植え込もうとした結果、屋上庭園が発生した、と述べる。当時、藤森は「神長官守矢資料館」と「タンポポハウス」を同時並行的に設計していた。これらを「自然における建築のあり方」と「都市における自然のあり方」の二項対立的に思考していた。これらの竣工ののち、藤森は学会員

の赤瀬川の自邸である「ニラハウス」を設計した。赤瀬川の自邸の屋根のニラや茶室の漆喰塗りなどを素人で構成された「緋文建築団」が施工した。これらは、すべて路上観察学会の一連の流れから発展したものである。ここに、素人性と緋文・原始が見えるのではないかと。藤森の建築史家から建築設計者への転機には、路上観察学会からの影響が多分に含まれているのではないだろうか。

### 荒俣宏

荒俣は、1985年から1987年まで『帝都物語』を執筆した。藤森の『明治の東京計画』から路上博物研究会、路上観察学会までの活動で観察、収集した物件を積極的に物語に投入した。

『帝都物語』のあとがきを分析すると、第一巻では言及なし、第二巻では藤森による『明治の東京計画』の言及あり、第三巻から第六巻まででは「路上博物倶楽部」への言及あり、第七巻では「路上観察学会」の言及あり、第八巻から第十巻まででは、言及はないが、未来への展望を記していた。路上博物倶楽部や路上観察学会で収集した物件や観察した地域などは、直接的に内容に関連してくる。平井 [2013] は、『帝都物語』の構成を三つに分類したが、路上博物倶楽部、路上観察学会からの影響があったものと前提を置き、解釈する。

- 歴史そのものとしての「事物」からその表象へ
- 表象が公開された地点から、表象が現在、未来において解釈が施され続ける永遠の地点へ
- 歴史が表象のテキストとして<叙述>される工程内の複層的位相へ

単なる事物が表象へ現れる際には、丹念な観察による発見が必要である。この点で、路上観察学会の影響が含まれていると考えられる。「トマソン」や「看板建築」などを考現学的な手法を用い観察し物件を宮武的な手法をもって表現、解釈した。観察によって発見された物件は、叙述されることによって複層的位相に取り込まれたのではないだろうか。

表2 本論の小结

分析項目	赤瀬川原平	藤森照信	荒俣宏
観察行為に至る契機 Why?	千円札裁判での敗北による	「五感で味わった現場ならではの感覚」による	幼少期からの収集癖による
観察したものの表現手法 How?	宮武外骨の表現手法	今和次郎の表現手法	南方熊楠の表現手法
観察した物件 What?	無用であるが美しく保存された物件	西洋館、動物装飾	都市の全てのオブジェ
路上観察学会後の活動 After	考現学的手法による私小説の執筆	建築の設計	『帝都物語』の完結

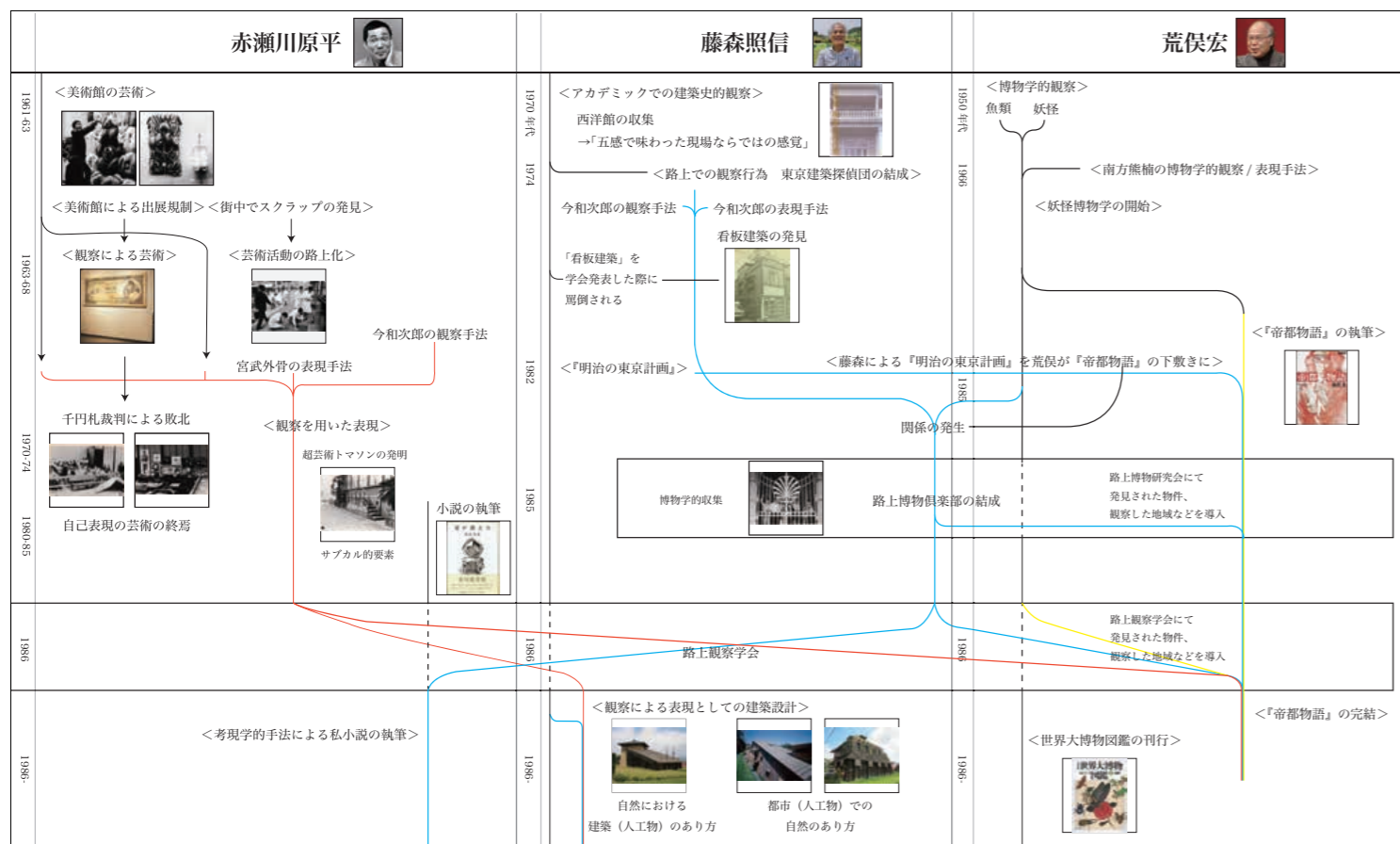


図6 本研究の対象の活動の変遷

## 第六章 比較分析

本論にてまとめた「観察行為に至る契機」、「観察したものの表現方法」、「観察した物件」は、路上観察学会の活動以前の成果であり、「路上観察学会後の活動」は路上観察学会の活動を経た直後の成果についてまとめたものである。

ここで、路上観察学会の前の個人の活動の性質についてそれぞれ共通点を見出す。

□赤瀬川原平と藤森照信は、対本流的態度という共通点を見出せる。赤瀬川は、芸術を本流から離れた地点から行っていた。藤森は、アカデミックでは掬いきれない感覚を「建築探偵」での建築観察から得た。

□藤森照信と荒俣宏は、博物学的感覚を持つ人物であるという共通点を見出せる。藤森は、西洋館、日本中の近代建築を収集することを目的として、「東京建築探偵団」を結成する。荒俣は、「妖怪」という対象に関わる全ての情報を集めることを目的として「妖怪博物学」を立てた。

□荒俣宏と赤瀬川原平は、独人的思想を持つという共通点を見出せる。荒俣は、『世界大博物図鑑』にて世界中の全ての自然物をまとめる作業を行った。赤瀬川は、無用であるが美しく保存された物件を『超芸術トマソン』と定義し、理論化した。

以上から、3名の学会員にそれぞれ共通項を見出せた。

表3 学会員の共通項について

赤瀬川原平	<観察>による模型千円札の制作、ハイレッド・センター	対本流的態度
藤森照信	学術論文で掬いきれない感覚を得るための建築探偵	
藤森照信	東京建築探偵団、路上博物倶楽部での観察手法	博物学的手法
荒俣宏	幼少期からの収集癖	
荒俣宏	好きなものを収集し続ける姿勢	独人的思想
赤瀬川原平	『超芸術トマソン』を収集し、分類する姿勢	

## 第七章 考察

□本論にて、路上観察学会の個人について情報収集、分析した。また、路上観察学会の以前の活動を比較分析することによって共通項を二人ずつ見出した。以上の共通項と路上観察学会の直後の活動を考察材料とし、学会員個人がもつ共通項とその後の活動の関係性を把握する。

1. 赤瀬川原平は、路上観察学会の活動を経て、私小説を執筆する。これは、日常の全てを収集する博物学的収集ともいえるのではないだろうか。

2. 藤森照信は、路上観察学会の活動を経て、建築設計行為を開始する。自分の個性を打ち出す「ニラ」「タンポポ」などを用いる独人的思想からなる建築を設計していたのではないだろうか。

3. 荒俣宏は、路上観察学会の活動を経て、『帝都物語』を完成させる。本小説は、「建築」や時代など「政治」に内薄する要素を導入し、執筆がなされていた。これは、社会に相対する態度を含んでいたということなのではないだろうか。

以上の3項目の共通項を示した図に導入すると、図7ようになる。

学会員の個人は、路上観察学会の活動を経ることで、その個人の持たない性質を獲得し、のちの活動を成立させたと考えられる。

## 第八章 結論

路上観察学会は、各個人が持たない性質をそれぞれが得る場所としての役割を果たしていた。

□第二章では、学会員の観察行為に至る契機について□第三章では、学会員が観察したものの表現手法について□第四章では、学会員が観察した物件について□第五章では、路上観察学会の後の活動について情報整理、分析を行った。□第六章では、路上観察学会の活動の前の出来事についてまとめた第二章から第四章を用い、学会員の共通項を見出した。これらの共通項と路上観察学会ののちの活動の関係を把握し、その影響を図化した。□第七章では、そこから路上観察学会の意義を見出した。

## 参考文献、図版出典

<sup>1</sup> 『アーハウス 特集 今和次郎と吉阪隆正師弟のまなざしと青森の都市・農村・雪』、アーハウス編集部、p.85

<sup>2</sup> 同時代建築研究会 [1993] 『ワードマップ 現代建築 ポストモダニズムを超えて』、新報社、p.44

<sup>3</sup> 同時代建築研究会 [1981] 『悲喜劇・一九三〇年代の建築と文化』、現代企画室、p.31

<sup>4</sup> 赤瀬川原平 [1989] 『超小説の冒険』、岩波書店、p.3-4

図 1,2,6,7, 表 1,2 筆者制作

図 3 論語アーカイブス『赤瀬川原平、日常から「前衛芸術へ」』

(<https://webronza.asahi.com/culture/articles/2014112200031.html>) (2023年8月30日閲覧)

図 4 毎日新聞『建築家/藤森照信 まるでジブリの世界自然と調和する建物は美しい』

(<https://mainichi.jp/articles/20200619/org/00m/200/004/000c>) (2023年09月05日閲覧)

図 5 NHKアーカイブス「NHK人×物×録」荒俣宏

([https://www2.nhk.or.jp/archives/articles/?id=D0009071142\\_00000](https://www2.nhk.or.jp/archives/articles/?id=D0009071142_00000)) (2023年9月20日閲覧)

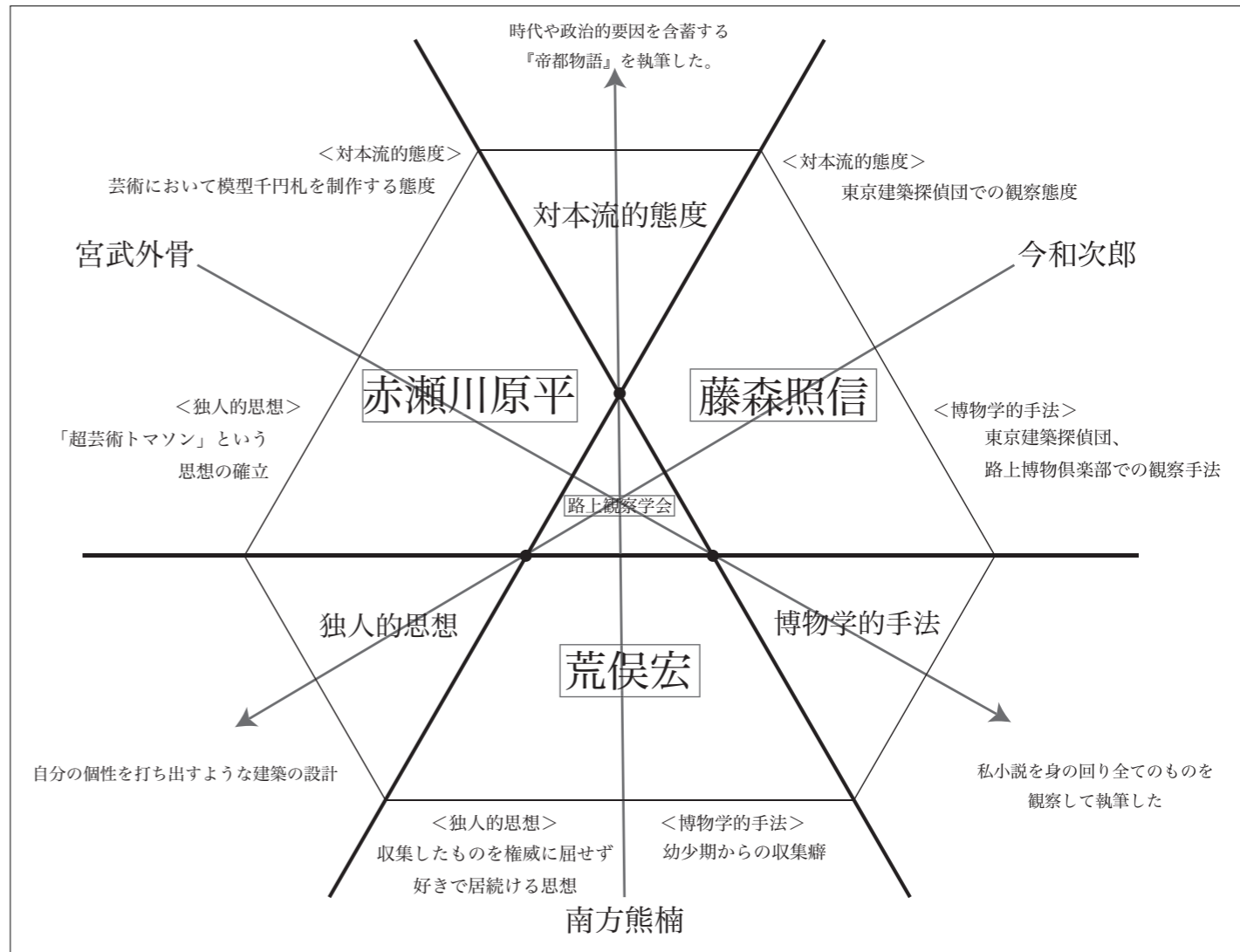


図7 学会員の共通項を含んだ図